

明治期長崎におけるキリスト教(覚え書)

第1部 カトリシズム

坂 井 信 生

A Note on Christianity in Meiji-Period Nagasaki

Part 1 Catholicism

Nobuo SAKAI

This paper represents the first part of a study on the activities and achievements of Christian Churches in Nagasaki in the Meiji-Period. The main focus here is on Catholicism. Protestantism will be dealt with in Part 2, which will be in *Kwassui Bulletin* 47 (to appear).

Right after the opening of Japan to the world, a Catholic Church was built in Nagasaki foreign settlement (1865). It brought the Catholic restoration among hidden Christians who had long awaited missionaries revisiting Japan. Thus, Nagasaki became the center of Catholicism in Japan at the time and took a leading role in the fields such as education and social work as well as mission work. This paper brings to light these contributions of Catholicism in Nagasaki to Japanese society at the dawn of the new era.

はじめに

本稿は明治期長崎を中心とするキリスト教の動向を概観したものである。

カトリック・プロテスタントを問わず、日本宣教を意図していたキリスト教各教派宣教師は、日本開国と同時にそれぞれの開港地に上陸し、禁教令が依然きびしく施行されていたがゆえに密かな活動を開始することになる。開港地のひとつである長崎においても、宣教師が続々と上陸したことはよく知られている。しかし、長崎は他の開港地と比較して、幕末から明治期にかけてのおよそ50年間、その活動がいたって顕著にみられる事実の特徴があるというべきであろう。とりわけ長期にわたるキリシタンの歴史を有する長崎カトリック教会の動向は、他地にはみられないドラマチックな展開を示しており、むしろ日本のカトリック教会復活の表舞台の観をすら呈している。同時に、プロテスタント諸教派に関しても、長崎は日

本プロテスタント揺籃の地のひとつに教えられることが可能である。

このように、筆者は長崎が近代日本の宗教史・キリスト教史上きわめて重要な地位を占めている事実を高く評価したい。しかしながら、キリシタン時代の研究はさておき、この時期の長崎キリスト教に関する論考がほとんど見当たらないことに驚きを禁じえない。それぞれの教派史、各個教会史あるいは個別の事件に関しては公にされているものの、今日われわれはその全体像を鳥瞰した著述に接することはできない。ただ昭和初期に編集された『長崎市史』に「基督教教会」の章があり、明治期のカトリック・プロテスタント双方の状況が記されているにすぎないのである^①。

数年前筆者は福岡におけるキリスト教略史を「覚え書」として公にした^②。この類書が存しなかったためである。本稿もまた同じ趣旨による「覚え書」として執筆されたものであり、近い将来に若き研究者の手で本格的なすぐれた長崎キリスト教論の上梓を切望しているところである。本稿はそれが公にされるまでの踏み台となりうれば、との願いで書かれている。

もともと本稿は明治期長崎におけるキリスト教、カトリック・プロテスタント双方の概観を、比較を交えながら明らかにすることを目的としている。しかるに、本『論文集』には紙幅に制限があるため、まず本号でカトリックの動向をのみ取扱い、次号にプロテスタントのそれを考察することにしたい。またこの理由に加えて、長崎キリシタン史研究はすでに多く公にされている事情もあり、開国以前のいわゆる長崎キリシタン史も割愛することとした。本稿で「長崎」という場合、当時の西彼杵郡の一部をふくむ、主として今日の長崎市域であることを付言しておきたい。

なお、本稿を作成するに際し長崎のカトリック教会・修道会の方々に大変お世話になった。とくに、長崎大司教区補佐司教高見三明師には格別のご厚情を賜り、大司教館図書室での自由な閲覧の便を与えていただいた。記して感謝の意を表したい。

I 開国からの禁教令撤廃まで

1. 長崎司教区

1858年（安政5年）徳川幕府は諸外国との修好通商条約を締結して鎖国を解き、外交・交易を再開するとともに、外国人に対する居留および信教の自由を認めた。しかし、カトリック教会においては、キリシタン禁制が厳格に施行されているにもかかわらず、これに先んじて、近い将来に予想される開国後の日本再伝道計画を有していたのである。

カトリック教会はヒエラルヒア（Hierarchia）を中軸として高度に組織化された宗教体系である。カトリック教会の日本伝道再開は「パリ外国宣教会」（Societas Parisiensi Missionum al Exterasgentes）に委託された。1664年に教皇アレクサンデル7世（Alexander VII）によって公認されたパリ外国宣教会は布教聖省指示のもと東アジアを中心に布教に努めた。布教地での現地人司祭の養成、風俗習慣への順応などがこの宣教会の特徴といわれている。

東アジアでの代表的司祭養成機関はペナン神学校 (Collège de Penang) であり、のちにのべるように、最初の邦人司祭は明治初期の迫害を避けてこの神学校で学んでいる。日本には1831年布教聖省の委託をうけ、中国、香港を経てやがて琉球にいたるのである。教皇ユリウス16世 (Julius XVI) は日本入国の目的を早く達成させるべく、1846年 (弘化3年) 琉球と日本をふくむ代牧教区を設定し、フォルカード (Théodore-Augustin Forcade) を代牧司教に任じた。かれは翌年初代日本代牧教区長として香港で叙階され、数名の宣教師とともに那覇に着任した^③。

琉球において宣教師は日本伝道再開に備えて日本語を学び、さらには辞書・文法書の編集まで手がけている。『パリ外国宣教会年次報告』1850年の項に、「数ヶ月前日本宣教に関して一日本人が彼〔リボア (Napoléon François Libois)〕に日本語を教えることを承知したのを利用することになった、ということで、この出会いは摂理のごとく思われた」と記されている^④。さらに1856年の項では「〔宣教師は〕常に官憲の監視のもとにあり、土地の人々とは少しも連絡はとれなかった。……この孤独な状態は語学の勉強を大いに進歩させ、かれらはすでに容易に話すことができた。メルメ (Eugène-Emmanuel Mermet) は辞書と文法書の編集に従事し、すでに大部分出来上がっている。」とも記されている^⑤。これら宣教師の中には、のちに旧信徒発見などで知られるプチジャン (Bernard Thadée Petitjean) をはじめ、フューレ (Auguste-Théodore Furet)、ジラルール (Prudence-Seraphin Barthélémy Girard)、ムニクウ (Piere Mounicou) など、長崎とも関係する宣教師の名をみることができ。かれらは琉球において「日本語を学習し、宣教の扉が開かれる時」^⑥を待っていたのである。また、日仏条約交渉に際して、これら琉球で日本語を学んだ宣教師が通訳を勤めたことも知られている^⑦。

条約締結による開港にともない開港地に外国人の上陸・居住が可能となった。病いのため帰仏したフォルカードに代って日本代牧教区長に任じられたジラルールは、1859年 (安政6年) 初代駐日フランス領事ベルクール (Duschesne de Bellecourt) とともに江戸に到着した。ここに1612年 (慶長17年) 徳川家康によるキリシタン禁制布告以来はじめて、カトリック教会宣教師が公然と日本の地に足跡を印することになったのである。

日仏修好通商条約の第4条に「日本に在る仏蘭西人自国の宗旨を勝手に信仰致し其居留の場所へ宮社を建るも妨なし」^⑧の規定があり、1862年 (文久2年) にまず横浜天主堂が完成し献堂式が挙げられた。ついで1865年 (元治元年) 長崎に大浦天主堂が竣工、盛大な献堂式が挙行された。ほどなく、この大浦天主堂で浦上キリシタン信徒発見という出来事が起きることになる。この時の大浦教会司祭はプチジャンである。かれは1860年 (万延元年) 琉球に來り、ジラルール司教の命で1863年 (文久3年) 長崎に着任、1866年 (慶応2年) 日本代牧司教に叙されるのである。この翌年から1869年 (明治2年) にかけて浦上信徒に対する大弾圧、いわゆる「浦上四番崩れ」が生じ、1873年 (明治6年) にいたってようやく帰郷が許される

が、この間のプチジャンの心労は一通りのものではなかった。

さて、1876年（明治9年）従来の日本代牧区は2分され、東京を中心に中部から北海道にいたる地域の北日本代牧区（北緯聖会）と、近畿以西の南日本代牧区（南緯聖会）とされた。後者は長崎を中心に5,000をこえる信徒を数え、大浦教会を司教座にプチジャンが従来通り司教の責務を担った。1888年（明治21年）さらに南日本代牧区の分割が行なわれた。近畿・中国・四国をふくむ地域が第3の代牧区として独立、中部代牧区と称されて大阪に司教座がおかれた。そのため、南日本代牧区は長崎を中心に九州地域と沖縄に縮小された^⑨。

さらに1891年（明治24年）北日本代牧区も2分され、日本における教会行政組織は4地区となった。これと同時に、各代牧区は司教区に昇格し、東京大司教区、大阪、函館そして長崎司教区となり、初代長崎司教としてクーザン（Jules-Alphonse Cousin）が大浦教会に着座した。クーザンは1866年に来崎、迫害を避けて10名の神学生をペナン神学校に委託した折に尽力した神父である。長崎司教在任は26年に及び、とくに日本人司祭養成と布教根拠地の増設に心をくだき、40名の司祭を叙階し、また35の教会を新築し、信徒数は倍増したといわれている^⑩。

ちなみに1895年（明治28年）の日本カトリック教会の統計^⑪をみると、長崎を中心とした九州一円の長崎司教区が、日本全体の中でいかに重要な位置を占めているか、を直ちに理解することができる（表1参照）。

表1

	信徒総数	邦人司祭	伝道士	天主堂	神学生
全 国	50,302	20	304	71	46
長崎司教区	32,655	17	200	53	28
対全国比 (%)	64.9	85.0	65.8	74.6	60.9

2. 浦上四番崩れ

長崎においては1862年（文久2年）イギリス国教会系のプロテスタント教会が東山手居留地に建立されたのに続いて、1865年大浦天主堂が完成、日本26聖殉教者に奉獻され、ジラールにより祝別式が盛大に挙行された。かれはその日の模様を記している。「あらゆる国と宗教の代表が寛大な心をもってこの建設に協力してくれた。その完成をともに喜びにあふれて、多数の人々が祝別式に参列した。祝別式は2月19日に行なわれた。町の有力者と地域の軍人たちは制服姿で参列した。長崎港に入港していた4ヶ国の軍艦はこの祝典に尚一層の華やかさを加え、何人かの乗組員も公式に参加し、艦砲による祝砲も行なわれた」^⑫と。

宣教会の方針が究極的には日本人伝道を目的としたとはいえ、禁教令下にあつて一応は条約にしたがい、フランス人を中心とする長崎居留外国人の司牧を担当した大浦教会に、まっ

たく予期しない事態が生じた。長崎で「フランス寺」と称された大浦天主堂に、この年の3月17日、7代後には再びローマの宣教師が来日すると伝承を信じ、密かにキリスト教信仰を保持し続けてきた浦上の潜伏キリシタン^⑩の一群が訪れ、プチジャンに自らの信仰を表明したからである。いわゆる「キリシタン復活」の、そしてまた「浦上四番崩れ」の端緒である。この事件に関してはこれまで多くの労作が公にされているので、本稿ではその概略をのべるにとどめたい^⑪。

キリシタンであることを名乗り出た浦上旧信徒に対して、宣教師は禁教令下ゆえに秘密裡に潜入し司牧指導を開始する。そのひとりロカーニュ (Joseph Marie Laucaigne) は「和服を着、丁髷の鬘をかぶり、草鞋を履き、角帯を締め、日本人に化けて」夜陰にまぎれて浦上を訪ねた日々を「私の一生の中で一番幸福なのはその時であった」と述懐している^⑫。かくして、浦上には4ヶ所の秘密礼拝所が設けられ、大浦教会から宣教師が密かに出張、教理を教え洗礼を授け、ミサを行なうなどの活動を続けたことが知られている。聖マリア堂 (本原郷平)、公現の聖ヨゼフ堂 (本原郷辻)、サンタ・クララ堂 (家野郷川上)、聖フランシスコ・ザビエル堂 (中野郷長与道) がそれであり、いわば大浦教会の巡回教会ということができよう^⑬。

もちろん、こうした動きを当局も察知していた。探索方の報告によれば、「仏僧も深夜折々姿を変御国人の体に成船路浦上村に参り経文等伝授いたし鶏鳴頃帰館いたし申候」「浦上村へも当時別紙絵図面の場所へ仮に天主堂を設異仏を安置いたし信仰のもの参詣いたし申候」など記されている^⑭。こうしたカトリック宣教師の密かなしかし多忙をきわめた活動と比較して、長崎在住プロテスタント宣教師は本来的な宣教活動ができず、日本語学習あるいは英語教育に携わり、来るべき伝道開始の日に備えていた。たとえば1869年来崎の英国教会伝道協会 (Church Missionary Society, Church of England) のエンソール (George Ensor) は「日本に到着して3ヵ月を経過したが、私は改宗者の名簿のごとき伝道統計を提出することができない」と報告している^⑮。

こうした中で「浦上四番崩れ」が発生するのである。教会に復帰した信徒は幕府の対キリシタン政策の柱である「寺請制度」を否定し、檀那寺である聖徳寺に無届けの自葬を敢行した。これを契機に浦上信徒の存在が表面化し、長崎奉行徳永石見守昌新により指導的信徒を中心に男女68名が捕縛されたのである。1867年 (慶応3年) のことである。これに対し、長崎在住の宣教師および各国領事から信徒釈放の強力な要求が出されるが、一奉行の手で解決されることはなかった。

同年12月徳川幕府が倒れ明治政府が樹立された。しかし、新政府の神道国家主義による思想統制の必要から、従来の対キリシタン政策が踏襲された、ということより一層きびしさを増す弾圧策が講じられた。このため1868年指導的信徒114名を萩・津和野・福山の各藩に流配することとなった。さらに、翌1869年 (明治2年) には浦上信徒およそ3,300名が20藩22ヶ所に総流配されたのである^⑯。この処置に対して欧米諸国の外交団が一致して日本政府に嚴重

な抗議をくり返したのは当然である。また1871年の岩倉具視らの使節団は訪れた欧米諸国で日本政府の宗教弾圧に対するきびしい非難に直面した²⁰。かくして、1873年キリシタン禁制の高札撤廃の日を迎えることになる。各地に流配されていた信徒は数年振りに浦上帰郷が実現するのである。とくに拷問などがはげしかった津和野をはじめとして、流配の地において体験した苦難の数々は「旅の話」として後世に伝えられている。

3. プチジャン—禁教令下の大浦教会

他方、大浦教会の動向はどうであったのか、プチジャンを中心にのべてみよう。

かれは琉球において日本語学習に専念したが、長崎着任後も日本語の勉学を続けた。このことはのちに「プチジャン版」として知られる出版活動に大きく資した。同時に長崎のキリシタン史跡の探訪にも意を注ぎ、とりわけ26聖人処刑の地を「立山」と特定している²¹。もっとも今日では「西坂」とされている。またかれは長崎に新たに設けられた外国語学校（おそらく中国・オランダ・イギリス・ロシア・フランスの5カ国語を教授した済美館—のちに広運館と改称—と思われる）からフランス語教授を依頼され、キリスト教に好影響をあたえることを期待して受諾している²²。

大浦教会の果すべく重要な役割は長崎在留外国人の司牧であった。プチジャンは友人宛の書簡で、フランス人をはじめイギリス・ドイツ・オランダ・アメリカなどあらゆる国籍のカトリック信徒をもっており、日曜日には全員がミサに出席するので、この天主堂では狭すぎる、とのべている²³。大浦教会においては明治年間に外国人の洗礼12名、堅信37名、結婚19組、葬儀110名が記録されている。混血児4名の洗礼も長崎ならではであろう²⁴。

日本人信徒に対する司牧もまた大浦教会必須の課題であった。旧信徒発見以降の大浦の果たした役割は看過できない。浦上をはじめ西彼杵、遠くは五島といった長崎県下各地の信徒の司牧教育は、数名の宣教師の手に余るものがあり多忙をきわめた。そのため日本人司祭養成の神学教育あるいは速成の信徒伝道士養成につとめなければならなかった。大浦では、1870年（明治3年）から77年（明治10年）の間に7,318名（男3,822名、女3,496名）の日本人受洗者があり、最大は禁教令が解かれ「旅」から帰郷した1873年の2,355名（男1,232名、女1,123名）である²⁵。

旧信徒を発見しかれらの司牧に全責任を負っていた大浦のプチジャンは、浦上信徒総流配に驚きかつ悲しみ、事件の真相を外国外交団に直訴すべく横浜に向うなど解決への努力を惜しまなかった。こうした中でかれはヴァチカンでの会議に出席する。ローマで日本の実情を報告し援助を求めることもその目的のひとつであった。かれは帰日後の1871年大浦教会で26聖人の祝祭を守るが、この祝日を機に「御主に対してとられし悉くの人々」へ宛てた書簡を、また翌年「愛する処の子供成日本切支丹中へ」の書出しの書簡を、木版印刷にして流配中の信徒に密かに配布している²⁶。このように、司牧者としてかれは流配先の各地で苦難に遭遇し

ている信徒に慰めと励ましをあたえたのである。

プチジャンの顕著な功績としてあげうることのひとつは、いわゆる「プチジャン版」と呼ばれる出版事業である。長崎の信徒との接触を通してかれらが秘蔵していた文献の収集につとめ、ラテン語やポルトガル語などキリシタン時代の宗教用語の多くふくまれた教理書・祈禱書を伝写し使用している事実を知った。一方、横浜でムニクウらが編集した『聖教要理問答』が出版されて、長崎での使用を求めて送付されてきた。これは実に約250年間絶えていたカトリック出版の記念すべき復活であった。しかし、本書は中国で使用されていた漢語教理書の直訳的なもので、漢学の素養をもつ知識階級には有益であっても、農民主体の長崎の信徒にはむずかしく適切とは考えられなかった。加えて、プチジャンはキリシタンの伝統用語保持がかれらに新奇の感をあたえることなく、日本教会の再生を計るのに不可欠との見解を有していた。1866年かれが代牧司教に任ぜられ、事実上信徒は長崎のみであったことから、かれのキリシタンの伝統保持の方策が採択されることとなった。

プチジャンはまずロカーニュの助力をえて、キリシタン伝来本を利用し『聖教初学要理』の編纂に着手し1868年(慶応4年)に出版している^②。さらに同じ方針のもとづく『聖教日課』『贍礼記』(教会暦)をも出版している。この出版に際して貢献したのが、のちに西彼杵郡出津で布教のみならず殖産事業にも大きな足跡を残したド・ロ(Marc-Marie De Rotz)である。プチジャンの指示で石版印刷術を習得して長崎に着任したかれが、大浦教会の印刷室でこれらのプチジャン版を手がけているのである。

II 禁教令廃止以降

1. 大浦教会^②

1873年(明治6年)は日本キリスト教史上きわめて重要な年である。この年の2月待望のキリシタン禁制の高札が撤廃され、ともかくもキリスト教信仰が許容されたからである。長崎在住の宣教師は、カトリック・プロテスタントを問わず、かれら本来の宣教活動を公然と開始することになる。他方、すでに教会への復帰を果たした信徒はもはや当局による迫害弾圧の恐怖にさらされることなく、宗教生活をいとむことが可能になったのである。

ところで、大浦教会はこの地におけるパリ外国宣教会の主要な活動拠点であった。すなわち南日本代牧区そして長崎司教区の司教座聖堂として九州一円にわたる伝道の、とりわけ旧信徒の教会復帰を促進する前進基地であったばかりでなく、在留外国人および日本人信徒のための小教区でもあった。さらには日本人司祭養成の神学校、また信徒伝道士育成の伝道学校の機能をも果たした。こうした多方面にわたる活動を担当する宣教師はまさに多忙をきわめた。1875年の『年次報告』はのべる。「長崎ではロカーニュ司教とそのもとにある同僚たちは、終日信徒や志願者の世話をしている。これらの人々は近隣の地や周辺の島々から訪れて秘跡をうけている」あるいは「宣教師館ではカテキスタの学校の経営も続けている」と。1878

年のそれには「9名の宣教師がロカーニュ司教指導のもとで、とくに旧信徒の末裔の所で骨の折れるしかも慰め多い使徒職に従事している」²⁹と。

何よりも大浦教会は総流配から帰郷した浦上信徒に対する援助活動があった。とくに帰郷の翌年長崎地方の赤痢・天然痘の大流行に際しては、ロカーニュ、ド・ロなどによる救護活動はよく知られている。また、かつてのキリシタン役職者を伝道学校で教育し、各地に派遣して教会復帰を促した。のちには、熊本・鹿児島・福岡など九州の主要都市への宣教もまた大浦教会を拠点に動き出すのである。

大浦教会には長崎在留外国人のみならず、長崎に入港するフランス艦船の乗組員もしばしば訪れ、聖体の秘跡にあづかっている。たとえばクーザンは1895年の報告で「この港にフランスの戦艦が数隻停泊」しており、「宣教会に来て秘跡にあづかるのは艦長や士官のみでなく、若い志願兵」もふくまれているとのべている³⁰。

大浦小教区がいつ設立されたかは明らかでない。おそらく1875年（明治8年）頃と推定されている。流配から帰郷した浦上信徒が安住の地を求めて移動してきた他に、五島・平戸あるいは近郊からの大浦地域への移住が続き、聖堂の増改築が必要とされる程であった。この頃の大浦教会ではサルモン（Marie Amédée Salmon）とコール（J-M. Corre）が司牧に当たっている。またかれらは外国人信徒の司牧と神学校教育に携り、サルモンはフランス人をはじめオーストリア・ベルギー・アメリカ・イタリア・ポルトガルといった国籍の信徒のほか中国人信徒のあることをのべている³¹。日本人信徒の司牧は、1882年日本人初の司祭に叙された3名のうちのひとり有安浪蔵が担当した。有安は2年前に大浦教会主管の要職に任ぜられている。

浦上教会が5,000をこえる信徒数であるのに対して、大浦の日本人信徒数は1885年（明治18年）145名、1896年（明治29年）で、152名と多いとはいえない。その理由として、長崎の町では「昔も今もありとあらゆる迫害を目撃してきたので、親たちはキリスト教信者に対する憎悪を子供たちに吹き込むのが自分たちの第一の義務であると思っている」と市民のキリスト教に対する偏見を指摘している³²。そして、その信徒のほとんどは「貧しく僅かな仕事を求めて町場の場末に連れていかれ、男も女も子供も積荷の上げ下ろしや、欧米人・中国人の工場などで僅かな作業に従事している」という。おそらく近郊農村や離島から工場や港湾関係に職を求めて市中に移住してきたことが推定される³³。

1890年（明治24年）は大浦天主堂が竣工し、その直後に旧信徒が発見されて25周年の記念すべき年であり、その銀祝（25周年記念）を祝っている。献堂当初の「1865年日本にはまだひとりの新信徒ももたない5人の司祭〔プチジャン・ムニクウ・ジラール・フューレ・メルメ〕がいるばかりであった。そして今年の3月17日、日本の教会は3人の司教とそれを囲むヨーロッパからの宣教師、15人の邦人司祭、それに劣らぬ数の大神学生、30人の神学生、2,000人の信徒の代表があった」と、クーザンはこの祝祭への参加者が全国で1万から1万5千に

ものぼった旨報告している^④。

2. 浦上教会(1)^⑤

長崎におけるカトリック教会の歴史の中核的部分であり、まさにその主役を演じたともいえる浦上教会に目を転ずることにしよう。禁教令下にあつて長期にわたりキリシタン信仰を守り続け、大浦天主堂が完成するやプチジャンを訪れて信仰を告げたのは浦上の人々であつた。そして、カトリック教会への復帰を果たしたかれらは秘密の礼拝所を設けて宣教師の指導を受けた。しかし、この事態が自葬事件を契機に当局の弾圧を誘発するところとなり、3,000をこえる信徒が総流配されるという、いわゆる「浦上四番崩れ」が起こるのである。

1873年ようやくにして禁教令が解かれるにおよび、浦上に帰って来たとはいえ、かつての住居は略奪にあい農地は荒廃しており、修理して雨露をしのぐか掘立小屋に住むか、とにかく惨憺たる状況にあつた。もちろん、食糧を入手するのに十分な経済力も持合せていなかった。こうした困窮の中にあつながらも、かれらは生活の立直しを計り、そして何よりもカトリック信仰を公然と実践できることを最高の喜びとした。しかし、翌年には赤痢や天然痘が流行さらに台風の襲来もあり大きな被害を受けた。この窮状の中にあるかれらに大きな助けとなったのがド・ロである。医学・薬学の豊富な知識をもつド・ロは、大浦から毎日通つて施療に当りはげましをあたえた。このド・ロの救護活動を助けたのが、「旅」から帰つた岩永マキをはじめとする数名の若き女性であつた。かの女たちの活動は、のちにのべるように、ド・ロの指導をえて「浦上十字会」の結成となるのである。

「旅」から帰郷した浦上信徒は、日常生活では塗炭の困窮の中にあつながらも、ミサにあづかり聖体を拝領するために大浦まで足を運んだ。かつての仮聖堂はもちろん破壊されていた。そこでかれらは浦上に仮聖堂建立を計画しはじめる。土井に適当な家屋を見出し、「サンジュアンバプチスタ小聖堂」として用いられることとなった。1879年（明治12年）のことである。大浦から通つていたポアリエ（Jean-Baptist François Poirier）は、やがてこの小聖堂に仮寓して浦上信徒の司牧に尽力した。しかし、この仮聖堂も数千名の信徒には手狭であり、さらに大きな聖堂建設を望む声が日増しに大きくなっていったのである。

こうした時に、浦上の旧庄屋高谷家の屋敷が売りに出された。かつて、心ならずも絵踏みを強制され、信徒総流配に際して呼び集められた記憶も新しい場所である。かれらはこの記念すべき土地屋敷を何とかして入手したいと懸命の努力を重ね、ついに1880年売買契約にまでこぎつけた。この仮聖堂は、やがて東洋一と称され1945年の原爆によって破壊された浦上天主堂が完成する1914年まで用いられ、浦上信徒の信仰生活の中心的依り所として機能した。「岬の上に幾世紀もの間浦上の領主の住まいであつた館がそびえている。ここが永い間信者たちがイエズス・キリストのために苦しんだ所であり、またここで十字架を足で踏まされたという不幸を味わつたのである。摂理としか云いようのない不思議な出来事があつて、この家

が信者たちのものとなり、仮聖堂として改造された」と『年次報告』は記している³⁵。

旧庄屋屋敷の仮聖堂は和風で天井も低く、さらに老朽化が進み、5,000人をこす信徒にはあまりにも狭く、本格的な新聖堂建築の声が一層増幅していったのは当然であろう。1888年（明治21年）浦上小教区主任司祭に任ぜられたフレノ（Piere-Théodore Fraineau）は、1892年（明治25年）この声に応じて庄屋跡地に新聖堂建築を計画しはじめた。貧しい信徒や在留外国人の献金、フレノによる内外の募金活動などの資金をえて、フレノ自身の設計と監督のもと1895年着工の運びとなった。何よりも信徒による労力奉仕が大きくな力になったのはいうまでもない。「司教が自ら設計をつぶさに調べて実行に移す許可を与えられた時から、何千という大小の腕がつるはしを振り、土を運び、樹木を切り倒し、石を掘り出すなどしてきた」とクーザンはのべる³⁶。

工事は日清・日露の両戦争のために資材購入費や人件費が高騰し、一時中断の事態もあったが、ともかく急増する信徒の要望もあって工事を急ぎ、ついに1914年（大正3年）3月17日浦上信徒発見50周年の記念すべき日、長崎司教コンバス（Jean Combaz）により盛大な献堂式が挙行され、無原罪の聖母に奉獻されたのである。ところで、浦上天主堂には鐘楼がなく、正面に双塔を建てることになり1925年（大正14年）に完成した。かくて着工から30年の歳月を経て浦上天主堂の完成をみた。この東洋一の偉観を誇り、また浦上信徒苦難のシンボルともいえるこの天主堂が、1945年の原爆で無惨にも破壊されたことは周知の通りである。

新聖堂の建築が開始された1895年1月のことである。浦上で盛大な儀式が営まれた。司教クーザンは記している。「浦上においてわれわれは記さずにはいられない盛儀をみた。信者たちの捕縛25周年記念についてである。私の個人的意見としてかれらの帰還解放25周年を祝うことであったが、しかしかれらは3年にわたった長い殉教の始まりを記念し祝うことを望んだ」³⁷と。この日捕縛逮捕、そして総流配の苦難を記念するミサが盛大に執り行われたのである。

3. 浦上教会(2)

ここで浦上教会に関連した1、2のエピソードを紹介しておきたい。

大浦天主堂でプチジャンと出会い教会への復帰を実現した浦上信徒が、行動が制限されていた宣教師に代って、周辺の各地さらには五島にも進んで出掛け、潜伏キリシタンの群を探し出しその復活に大きく貢献した事実はよく知られている³⁸。ここでは浦上とその後も深い関係をもつにいたった筑後今村（現・福岡県三井郡大刀洗町）をその一例として取り上げてみよう³⁹。

浦上の一復活キリシタンが仕事で久留米に出掛けた折、今村にキリシタンが潜伏しているとの情報をえてロカーニュに伝えた。かれは直ちに深堀徳三郎ら4名に今村の実態調査を依頼した。1867年（慶応3年）のことである。かれらは今村に旅立ち、村人と会うが警戒され

て何ひとつ聞き出すことができない。しかし、やがて両者ともにキリシタンであることが判明、徳三郎らは長崎にローマの宣教師が派遣されて大浦に天主堂が建立されたことなど、長崎の状況をつぶさに語った。かれらは今村の平田弥吉を伴って長崎に帰った。弥吉は大浦で受洗して今村に戻り、これらの事実をかれ自身の口で村人に伝えた。このことがやがて今村カトリック教会の復活となるのである。

今日、今村には周辺の農村風景とは何かしら異質の、正面に2つの塔を有する赤レンガの教会がそびえている。この教会の建築工事は鉄川与助の手により1912年（明治45年）にはじまり、1913年に竣工し献堂式が挙げられた。ところで、前述のように浦上天主堂は1895年着工、1914年に本体の大部分が完成したが、正面の双塔完成は幾分遅れての1925年のことである。規模においては今村が小であるとはいえ、両天主堂はともに双塔をもつロマネスク式赤レンガ建築であり、外観と構造にかなりの類似がみられる。それゆえに今村が「少し遅れて建てられた浦上の大きな天主堂のモデルであることは明白」とラウレスはのべている^④が、このモデル問題は若干の疑問点もあり、専門家の手に委ねたい。いずれにしても、浦上と今村のカトリック教会は信徒発見をはじめとして密接な関係があり、とくに浦上天主堂が無惨にも塵灰に帰した今日、ありし日の浦上天主堂を偲ぶ唯一のよすがとして、今村教会の存在は大きいといえそうである。

今ひとつ浦上その他長崎で押収されたキリシタン遺品の後日譚を記しておこう^⑤。寛政年間に始められ数多くのキリシタンに苦渋を強いた踏絵は、1858年の『日米修好通商条約』に「踏絵の仕来りは既に廃せり」とあるようにその後は不要となり、その他の押収キリシタン遺品とともに旧長崎奉行所宗門倉に納められていたという。禁教令解除の翌年1874年（明治7年）、長崎県令宮川房之はその保管につき教部省に問合せをした。神奈川裁判所御雇外国人ブツが長崎裁判所官員を通じ、長崎県が保管する「銅版へ耶蘇ノ像ヲ鑄模シタルナリ約24枚、踏絵銅版并木像陶像等」の購入申入れがあり、長崎県が教部省への納入を願い出たのである。

こうした経緯によって同年これらの遺品は教部省へ移管された。その後の1876年今度は長崎の商人結社から長崎で開催の博覧会にこれらの遺品を出品したい旨長崎県を通して教部省に申入れるが、教部省は「長崎博覧会ニ耶蘇踏絵銅版ヲ列スルヲ准サス」と拒否している。1877年教部省廃止後、これらのキリシタン遺品は内務省寺社局所管となり、さらに宮内省、帝国博物館そして現在の東京国立博物館所蔵と変遷を重ねている。

ところで最近の新聞報道^⑥によれば、長崎県は2005年秋に開館予定の「歴史文化博物館」（仮称）に、東京国立博物館所蔵のこれらキリシタン関係遺品を常設展示する方針を明らかにしたという。実現すれば130年ぶりの「里帰り」ということになる。

4. 中町教会その他

次に話題を中町カトリック教会^④および長崎近郊の教会に移すことにしよう。

1892年の『年次報告』でクーザンは中町教会最初期のすがたを次のように記している。「町の内部では、日本人教区を担当している日本人司祭は、3年前から一軒の借家に小さい聖堂と自分の住居をもっていた。……殉教者の山のふもとにあつて、昔の大村公の邸宅のあったすばらしい土地に出会せたのは、摂理がそこに私たちを招いたのだと信じている。邸宅は焼失したが、かなりの建物が残っており、いくらかの修繕で邦人司祭を泊ませ、黙想会などのために十分な数の部屋も整えることができた」^⑤と。

『年次報告』にもあるように、中町教会は1889年（明治22年）神学校を終えて叙階した島内要助が金谷町の古家を借受けてスタートした。当時大浦教会は主として外国人向けで日本人信徒には不便であり、年々増加する市中の信徒のための教会設立が望まれていたのである。島内の尽力で同年末にキリシタン大名大村純忠ゆかりの旧大村藩邸跡の現在地を購入、しばらく仮聖堂として用いた。クーザンはこの地を「殉教者の山」あるいは「日本のモンマルトルと呼ぶことができる聖なる山」のふもととも記している^⑥。プチジャンが26聖人殉教地を「立山」と推定していることから^⑦、クーザンもこの地を聖なる立山のふもとと解したのであろう。今日ではプチジャンの立山説は否定されてはいるが、中町教会は殉教地「西坂」からも至近の場所である。

やがてこの由緒ある場所に聖堂が建設されることになる。教会用地は確保されたとはいえ、170名ほどの信徒には十分な建築資金が用意できなかった。この窮状を知ったフランス・リヨンのアントワネット・ペリエ夫人による8万フランの献金をえて^⑧、1897年（明治30年）に新聖堂が竣工、司教座聖堂の保護者26聖人の300年祭を兼ねて祝別式が挙行された。そこには60名をこえる聖職者、神学生、3,000人をこえる信徒のすがたがあつた。さらには長崎市の諸官庁官吏が多く列席しているのにクーザンは驚き、「カトリック信徒が、30年前には迫害されていたこの町で、市民権を獲得したのだろうか」と、時の経過と変化に深い感慨をもらしている^⑨。

さて、長崎近郊の状況はどうであつたか。修好通商条約締結により外国人の居留地内居住は認められたとはいえ、外国人の自由な旅行は許されなかった。「外国人遊歩規定」が数多くの制約を課していたからである。とりわけ宣教師の外出には禁教令のもと官憲の厳重な監視の目が光っていた。長崎の場合、長崎奉行の管轄区域すなわち御料地に限定されていたという。明治に入ってもこの規定は継続され、その後いくらかの改正があり、1879年に南北両高来郡、東西両彼杵郡などの地域が遊歩規定範囲に拡大されている^⑩。

1873年禁教令撤廃以降の宣教師の活動範囲にしても、少なくともこの規定に表面的にはしたがったものであり、教会もこの範囲内に設立されている。しかしながら、この制約のゆえに宣教師は各地に設立された教会への定住は不可能であり、したがって、のちにのべるよう

に自由な行動が可能な日本人伝道士・司祭の養成に努力を傾けることにもなる。宣教師はこれらの教会を巡回し、洗礼・聖体などの秘跡を司さどり、また伝道者の指導を試みたのである。とはいえ、こうした宣教師の巡回にも届出が求められ、地方警察官や戸長の監視があったという。日本政府は不平等条約改正交渉に備えて順次こうした制限を緩和し、1899年（明治32年）この「外国人遊歩規定」は全廃された^⑤。高木一雄氏の調査によれば、この時期までに長崎市域、近郊において設立されたカトリック教会は以下のごとくである（表2）^⑥。

表2

教会	献堂式	奉 献	所 在 地	現所在地
大 浦	1865	日本26聖殉教者	長崎居留地南山手	長崎市南山手町
土 井	1879	聖ジョアンバプチスタ	西彼杵郡上村字下土井	(a)
浦 上	1880	無原罪の聖母	西彼杵郡上村字山里	長崎市本尾町
大 明 寺	1880	聖パウロ	〃 大明寺村	西彼杵郡伊王島大明寺
神 ノ 島	1881	聖フランシスコ・サビエル	〃 淵村字神ノ島	長崎市神ノ島町
出 津	1883	至聖なるイエズスの聖心	〃 神浦村大字出津	西彼杵郡外海町西出津郷
黒 崎	1920(b)	イエズスの聖心	〃 〃 大字黒崎	〃 〃 上黒崎郷
三 ツ 山	1887	至聖なるイエズスの聖心	〃 浦上村木場	長崎市三ツ山
馬 込	1890	大天使ミカエル	〃 深堀村馬込	西彼杵郡伊王島沖ノ島
竹 松 (c)	1891	聖十字架称賛	東彼杵郡竹松村字桜馬場	大村市植松
高 島	1892	イエズスの聖心	西彼杵郡高島村	西彼杵郡高島町
大 野	1893	ロザリオの聖母	〃 神浦村大字大野	〃 外海町大字神浦
善 長 谷	1895	聖フランシスコ・ザビエル(d)	〃 蚊焼村善長谷	長崎市天籠町善長谷
香 焼	1896	聖ヨゼフ	〃 深堀村香焼	西彼杵郡香焼町
中 町	1897	至命の聖マリア(e)	長崎市西中町	長崎市中町

(a) 間もなく浦上教会に吸収 (b) 1887年土地購入、94年計画 (c) 現在の植松教会 (d) 現在は無原罪の聖母に奉献
 (e) 現在は聖16殉教者に奉献

5. 長崎公教神学校^⑦

長崎に着任の宣教師が直面した重大な課題は日本人伝道者・司祭養成であった。当初は在留外国人司牧にその活動が制限されていたとはいえ、信徒発見と教会の復活ついで禁教令撤廃による宣教活動の拡大にともない、宣教師の焦眉の関心が日本人伝道者養成に向けられるのは当然のことといえよう。とくに、パリ外国宣教会の基本方針のひとつが現地人司祭を養成し伝道・司牧に当るということであった。加えて前述の「外国人遊歩規定」による行動制約が課せられた宣教師にとり、管轄する教区内の諸活動を日本人に委ねることは緊急の課題でもあった。次稿で取り上げる予定の長崎プロテスタントの動向においても、この日本人伝道者養成は重要課題であり、各教派神学校が相續いて設立されることになるのである。

1865年の信徒発見による日本カトリック教会の復活は、同時に神学教育の再開でもあった。

復帰した信徒の司牧は宣教師の緊急の責務であり、まず水方のごときキリシタン組織の指導者を夜間に司祭館に集め、簡単な教理指導をする信徒伝道士の育成をはじめた。かれら速成伝道士は各地に派遣され潜伏キリシタンの教会復帰を促進した。前述の筑後今村もその一例である。この伝道士養成法はのちに「伝道学校」と呼ばれて各地に設立され、カテキスタ(教え方)養成に大きく資した。

他方、プチジャンはロカーニュとともに、浦上と五島の信徒の子弟の中から秀でた3少年を選抜して秘密裡に司祭館に住ませ、カトリック教理とラテン語を教えて神学教育を開始した。1866年、信徒発見の翌年のことである。司祭館2階天井裏の「無原罪の御孕りの間」と命名された部屋が教室として用いられた。この無原罪の御孕りの祝日12月8日後に使用が始まったので、この日が神学校創立記念日として祝われることになる。

その後神学生の数は次第に増加したが、カトリック教会に対する弾圧の激化にともない、プチジャンは安全な場所での勉学を続けさせるために、神学生10名をクーザンに託してマラッカ半島ペナンのパリ外国宣教会神学校へ送った。しかしかれらの大半は病に倒れてしまった。さらに1869年浦上信徒総流配に際し、ロカーニュは13名、ついで4名の神学生を香港に向かわせこの地で神学を学ばせた。1871年(明治4年)横浜に神学校設立があり、かれらは横浜に帰り勉学を続けた。1873年この神学校は東京猿楽町に移転、のちに各地からの入学者も増加し総数70名にも達したという。この年12月、長崎出身でペナン帰りの深堀達右衛門、高木源太郎、有安浪蔵の3名がはじめて剃髪式(Tonsura)を受けている。

1875年(明治8年)大浦天主堂の傍らにド・ロの尽力により神学校校舎が新築され、長崎出身の神学生10名が東京から呼び戻された。とはいえペルー(Albert-Charles Arsenè Peru)ただひとりという教授陣の手薄から十分な神学教育が施されず、神学生は伝道補助などに従事する有様だった。1880年再びプチジャンが長崎に着任するにおよび、本格的な神学教育が開始され、ルノー(Alfred Renaut)が初代校長に任じられた。この頃にはつねに4、50名の神学生が在籍している。なお、第6代校長は『切支丹の復活』『浦上切支丹史』などで有名な浦川和三郎で、日本人初の校長である。1882年(明治15年)第1回卒業生を出す。後に復活信徒初の司祭に叙されたペナン帰りの前記3名がこの第1回卒業生である。高木と有安はやがてこの神学校で教鞭をとることになる。

校舎と校地、また100名にもみえない神学生と数名の教師陣からして、必ずしも充分とはいえないまでも、予科8年本科4年計12年間神学生は勉学に励み、内外の教師陣は誠意と熱意をもって教育指導に当った。予科では哲学のみならず物理学・宇宙学・自然科学史・数学なども教授されている^④。この神学校は教科書はもちろん講義もすべてラテン語で行われたゆえに、「羅典神学校」とも通称された。

その後の動きを簡単に記しておこう。カトリック教会が長崎のみならず各地に大きく発展するのにもともない、本格的な神学教育の必要が生じ、1925年(大正14年)浦上に校舎を新築

して移転した。しかし、昭和に入り神学校は再度大浦に、さらに東山手の東山学院跡に移り、といった具合に戦時体制への急激な時代の波により長崎公教神学校の性格も大きく変化した。つまり一時期隆盛をきわめ多くの司祭養成に貢献した長崎においては、司祭志願生養成の小神学校として存続し、長崎出身神学生の多くは戦後福岡に設立されたサンスルピス大神学院で神学教育を受けることになったのである。

6. 修道会およびカトリック主義学校

カトリック教会においては数多くの修道会が組織されており、今日の長崎にあっても27の男女修道会が出版・社会福祉あるいは保育所・幼稚園から大学までの教育事業など、それぞれ固有の活動を営んでいる。本稿ではその中から明治期長崎において活動した2、3の修道会の動向についてのべよう。

(1) 浦上十字会（現お告げのマリア修道会）⁵⁵

他の修道会の多くが外国で創設され、長崎でも活動の場を見出しているのに対し、浦上十字会の特徴は長崎において最も早い時期に、長崎の若き女性信徒により組織されたことである。1873年浦上信徒が総流配から帰郷し日常生活面で塗炭の苦しみに喘ぎ、加えて赤痢・天然痘といった伝染病、台風に難渋していた折、大浦のド・ロたちは救援活動を積極的に試みた。この活動を支援協力し奉仕活動に身を捧げたのが、岡山鶴島の流配地から帰郷したばかりの岩永マキをはじめとする4名の若き女性信徒であった。かの女たちはド・ロの指導のもと、津和野の流配体験者高木仙右衛門⁵⁶の納屋を借りて共同生活をはじめますが、これがのちに「女部屋」と呼ばれるようになる。ド・ロは毎日の時間割を定め、祈り・黙想そして諸活動の指針をあたえ、その共同生活を修道生活に準じたものとした。ド・ロが出津に転じた後は浦上担当となったポアリエが指導に当り、1877年（明治10年）「十字会」が設立されたのである。いまだ認可された正規の修道会ではなかったが、マキは会則を定め、従順・清貧・貞潔の誓願を守る厳正な規律ある共同生活が営まれた。十字会は実質的には近代日本最初の女子修道会といえる。

何時作成されたか不明であるが、マキの「十字会会則」には、たとえば「親ガ死シテモ家ニ行クコトデキズ」のごとき家族からの離別、「金銭、貸借ハデキズ」といった世の財の放棄、「門ヨリ内ニ男ヲ入レル許ナシ」という貞潔などが定められている。同時に、「患者ヲ看護スル時」「神父様ニ用アル時」といった教会や隣人への奉仕の際の配慮がみられるように、教会そして隣人へ仕えることがこの会の目的であることを示唆している⁵⁷。

マキたちが「浦上養育院」を開設したのは、かの女たちが女部屋で共同生活をはじめた年である。これは近代日本初の児童福祉施設ともいうことができる。ひとりの孤児を引取ったのを手はじめに多くの孤児・捨子の養育に当たったのである。浦上をはじめとする農村部の貧困は孤児・捨子を生む土壌であり、また風紀の乱れから私生児が少なくなかったからである。

マキはこれらの幼児を自らの戸籍に入れて我が子として養育したのであり、その数は294名にも上ったという^⑧。

このような浦上十字会を範とした活動はやがて各地の教会へも拡がりをみせ、十字会もまたそれらの精神的母体となり、積極的に「女部屋」創設に指導的役割を果たした。出津、黒島、鯛の浦、紐差、仲知など、明治年間に12の女部屋が設立されている^⑨。他方、各地から女性信徒が十字会で修養を重ね、帰村後その地の女部屋活動の中心となったという。かの女たちは特別な服装ではなく、いわば質素な俗服を身に着けた。具体的な活動内容は主として農業に従事し、米・麦・芋・野菜など自らと世話をしている子供の食料を生産し、現金収入のための機織りをもしている。また、カテキスタなど教会の奉仕、子供や老人の世話、さらには近隣の「かくれキリシタン」の人々への教会復帰勧誘など多方面にわたっている。

こうした女部屋は「愛苦会」とも称されてそれぞれの地域で活動を続けてきたが、昭和期に入ってそれらを統合する気運が生じ、戦後の1956年（昭和31年）23の女部屋が長崎教区立在俗修道会「聖婢姉妹会」として司教山口愛次郎より承認された。ついで1975年（昭和50年）ローマ聖庁より法的設立認可書が発せられ、名称も「お告げのマリア修道会」と変更して正式の修道会の新しいスタートを切って現在にいたっている。

(2) 幼きイエズス修道会^⑩—清心女学校

幼きイエズス修道会（Congrégation de l'Enfant Jésus de Chauffailles）は1859年フランスにおいて、教育と福祉事業を目的に創設された。この修道会の来日はプチジャン自身が修道会本部に立ち寄っての懇願によるという。かれは日本の女子教育の現状を憂い、総長メール・アンティエ（Mère Antier）にこの活動のための人材派遣を依頼したのである。1869年（明治2年）のことである。修道会ではこの要請に応じて人選と準備を行い、1877年（明治10年）マリー・ジュスティヌ（Marie Justine）を長に4名の修道女を派遣した。かれらは長崎を経て神戸に赴き、この地で最初の児童保護施設である「神戸セントファンズ」を元町居留地に設立した（のちに「神戸女子教育院」と改名）。ついで、大阪川口においても同様の施設を設けている。

長崎での活動は1880年（明治13年）ジュスティヌとセントエリー（Saint-Elie）が南山手に長崎修道院を開設、長崎における会の基礎を築くとともに、伝道婦養成学校と孤児養育施設を運営することになる。とくに伝道婦学校では将来カテキスタとして各地に赴く若き女性信徒の育成につとめ、この翌年には約60名がこの学校で学んだという。この学校には大浦教会司祭サルモンの母（Père Salmon）が大きな働きをした。かの女はその子の傍らで生活するために1871年来崎、教会近くの自宅で女性信徒や伝道婦に宿を提供し、多くの援助を与えた。

1885年（明治18年）本修道会は日本管区本部を大浦に設立し日本における活動の本拠としている。そして長崎を拠点に、岡山・京都（1886年）、熊本（1889年）に支部を設け、それぞれの地で教育機関や児童福祉施設を設立している。長崎においては1890年（明治23年）に

浦上支部を設立し、司教クーザンの要請にもとづき長崎のカトリック初の小学校「浦上三成小学校」を設け、無月謝でカトリック信徒子女の教育に寄与している^⑧。しかし公立小学校が整備充実されるにともないその存在意義が薄れ、1905年（明治38年）より生徒募集を停止し、最終学年の卒業生をまっけて1908年廃校の運命をたどっている。

この修道会の看過することのできない今ひとつの貢献は、明治期長崎で唯一のカトリック女学校の創設である。長崎ではプロテスタント系諸教派がすでに、活水女学校（メソジスト派）、梅ヶ崎女学校（改革派）、長崎女学校（聖公会）と女子教育を実施していた。ところが、これらの女学校は日本人対象であったために、修道会は1891年（明治24年）フランスから4名の修道女の支援をえて、かねてより要望されていた外国人子女をふくむ女学校を大浦に設立、寄宿生を中心とし、「聖心女学校」（10年後に「清心女学校」と改名）と命名した。「フランス学校」ともよばれたという^⑨。聖心女学校は予備（尋常）科・本（高等）科8年制のとくに日本人対象の小学校、仏語科・英語科の外国人子女対象10年制の洋学科からなり、寄宿生には日本人・外国人ともに収容した。いかにも国際都市長崎にふさわしい女学校というべきである。クーザンの報告をみよう。「長崎では幼きイエズス会修道女たちがヨーロッパ人の勧めもあって英語の講座を開いた。……プロテスタントの学校が近くにあるにもかかわらず、国籍・宗教と問わず数ヶ月で33名の外国人の若い娘たちを集めることができた（22はプロテスタント、ロシア正教8、ユダヤ教2）。また、かの女たちの日本人のための学校もよく運営されている」^⑩と。

その後の清心女学校について簡単に言及しておこう。日清・日露の両戦争のために外国人入学者が激減して経営難に立ちいたり、主として日本人子女対象の女学校として存続した。1929年浦上に移転、のちに「常清学園高等実践女学校」と改称するが、1945年の原子爆弾により校舎が全焼、一時期南山手で授業を再開したものの、学制改革を機に廃校となり約60年の歴史を閉じた。

なお、この修道会は長崎で1895年から1912年まで、長崎寄港のフランス海軍の依頼で病院事業を行い、「セン・ベルナル病院」の名でフランス海軍および居留外国人対象の医療活動を続けたことも記しておこう。今日の長崎では「信愛幼稚園」などの幼児教育あるいは教会・神学校の援助活動といった使徒職に従事している。

(3) マリア会—海星学園^⑪

明治期長崎において活動を開始し、今日にいたっている今ひとつの修道会にマリア会（Societas Mariae）がある。本修道会は1817年フランス・ポルドーで、キリスト教的世界観に立脚した知識と道徳を青少年に教授する学校教育を主たる事業に、シャミナード（Guillaume Joseph Chaminade）によって創設された男子修道会である。日本には1887年（明治20年）、教育事業に多大の関心を有していた当時の北日本代牧区司教オズーフ（Pierre Marie Osouf）の要請に応じて会士を派遣、翌年東京に暁星学校（現・暁星学園）を創立した。さらに、同

会は1898年大阪に明星学校（現・大阪明星学園）を設立している⁶⁵。

長崎におけるマリア会の活動は、1890年(明治23年)「長崎にはプロテスタントの学校があるにもかかわらず、カトリックは神学院と〔幼きイエズス会の〕小さな学校のあるのみである。長崎の人々はカトリック的教育を待ち望んでいる」との司教クーザンの要請に端を発している⁶⁶。翌年初代校長となるバルツ (Jacques Barth) が来崎、1892年大浦天主堂近くの浪平の借家で開校式をあげ、「暁星」と対ということで「海星」と名づけられた。

クーザンの報告によれば、当初は市の中心部に学校設置の意図をもってしたが、市民の反対があり県当局もこれに抗することなく、また師範学校・中学校教師もまったく援助の手を差しのべることはなかった。そのために正式の認可は数ヶ月放置されたままであり、やむなく居留地に開設した。開校時には居留地の子供が宗教・国籍の別なく集まったが、その数は15名であった。そこで夜間授業の申請をし、30名の生徒が出席するようになった、という⁶⁷。1895年(明治28年)海星学校は東山手の現在地に移転する。当時、東山手には活水女学校・鎮西学館・東山学院とプロテスタント系の学校がすでに設立されており、ここにカトリック系の海星学校が加わることにより、東山手はキリスト教教育の「学園の丘」の観を呈したのである。もっとも、のちに東山学院が廃校、鎮西学館が移転したことにより、東山手では活水と海星がそれぞれ校地を拡大してキリスト教教育を継続している。

海星学校の教育は小学生・予科生(高等小学校程度)、本科生(中等学校程度)に分かれていた。教師はフランス人・アメリカ人であり、生徒もほとんどが中国・ロシア・フランス・アメリカといった外国人子弟であり、授業も英語・フランス語・ドイツ語であった。当然教科書も原書主体であり、校内では日本語での会話が禁じられていたため、日本人生徒には英語・フランス語会話に堪能なものが多かった。海星学校の授業料はかなり高額であり、一般に官学偏重の気運が存していたにもかかわらず、入学者があったのは外国語の習熟に有利であったからだという⁶⁸。

1903年(明治36年)海星は「実業学校令」にもとづく商業学校として、商業予科2年、本科4年制に改組される。また、外国人児童を教育する小学校は他所になく海星のみであり、各地から海星に寄留させる外国人も多く、ことにロシア人子弟が急増した折には、ロシア正教会司祭にロシア語による授業を委託している。

1906年度のクーザンの報告によれば「マリア会の学校には380名の生徒が学び、3部に分れている。第1は商業、第2は日本人の初級・上級学校、第3は外国人子弟のためである。県の視学官や文部省の役人は度々学校を訪問し、賞賛を惜しまず、地方の報道関係者も好意的である」と海星学校の隆盛振りを記している。さらに、この学校が「現在32名の志願者、8名の修練者をもって」と、カトリック教育の成果として、司祭や修道士を志願する生徒が輩出していることによるこびを表現している⁶⁹。マリア会は海星学園のほかに2つの修道院とマリア志願院を運営し、今日も長崎で積極的な活動を続けている。

おわりに

本稿は明治期を中心とした長崎におけるキリスト教の動向を概観したものである。しかしながら、紙幅制限のゆえに、ここでは第1部としてカトリック教会関係のみに限定してのべてきた。プロテスタント系諸教派に関しては、第2部として本『論文集』の次号に掲載する予定である。

長期にわたるキリシタンの歴史を有する長崎にとり、開国にともなう外国人居留地の設置は他の開港地と異なる大きな意味をもっていた。とりわけ、禁教令下にあったとはいえ、居留地内におけるカトリック教会の創設、すなわち大浦天主堂の建立は、長年宣教師の再来日を待望していた潜伏キリシタン・旧信徒発見に重要な役割を果たしたからである。宣教師の密かな活動を通してのかれらの相続く教会復帰は、やがて「浦上四番崩れ」の悲劇をもたらした。国内さらには国際的外交問題にまで発展したこの宗教弾圧は、1873年の禁教令撤廃により終焉を迎えることとなる。かくして、長崎市域のみならず周辺の各地、五島の島々にも復活した旧信徒による数十もの教会が設立され、まさに日本におけるカトリック教会の中心地の観をすら呈するにいたったのである。

この時期の日本伝道は「パリ外国宣教会」に委託されていた。それゆえに、長崎でもフランス系修道会が主に活動し、とくにカトリック精神にもとづく学校教育に大きく貢献したがたが観察される。現在も活動を続ける「マリア会」の海星学校、のちに廃校となった「幼きイエズス会」の清心女学校あるいは浦上三成小学校がそれである。英・米系のプロテスタント諸学校が日本人対象であったのに対して、これらの学校は居留地在校の外国人子弟子女をも対象としているところに特徴をみることができる。また、長崎の若き女性信徒による「浦上十字会」の活動、就中、近代日本初の児童福祉施設である浦上養育院の創設も看過できない。いち早く伝道者養成の神学教育を開始したのも長崎であり、数多くの司祭を九州を中心とする長崎司教区はもとより全国の各地に送り出している。

いずれにしても、明治期長崎におけるカトリック教会が先駆的かつ中心的地位を占めていることは否定できない。次号にのべる予定のプロテスタント諸教派の動向とともに、長崎は近代日本宗教史・キリスト教史において、無視することのできないきわめて大きな意義を有している、といわなければならないであろう。 (未完)

註

- ① 『長崎市史・地誌編・神社教会部』下 591頁—688頁
- ② 拙稿「福岡キリスト教略史(覚え書)」『活水論文集』第43集 2000年
- ③ パリ外国宣教会については『日本キリスト教歴史大事典』1141頁、『カトリック大辞典』Ⅳ、36頁、258頁など参照。カトリック教会の日本再布教に関しては比屋根安定『日本基督教史』(256頁以下)、有老沢有道『維新変革期とキリスト教』(73頁以下)、海老沢有道、大内三郎『日本キ

リスト教史』(120頁以下)を参照のこと。

- ④ 『パリ外国宣教会年次報告』 1、10頁
- ⑤ 前掲書、13頁
- ⑥ 前掲書、16頁
- ⑦ 高木一雄『明治カトリック教会史研究』上、84頁以下
- ⑧ 前掲書、105頁
- ⑨ 『カトリック大辞典』Ⅳ、5頁—6頁、36頁など
- ⑩ 『日本キリスト教歴史大事典』447頁、『カトリック大辞典』Ⅰ、50頁
- ⑪ 『カトリック大辞典』Ⅳ、6頁
- ⑫ 『パリ外国宣教会年次報告』 1、27頁
- ⑬ 浦川和三郎『浦上切支丹史』20頁、同『切支丹の復活』前篇、260頁—261頁
- ⑭ 古くは姉崎正治『切支丹禁制の終末』(1926年)、浦川和三郎『切支丹の復活』(1928年)があり、最近では片岡弥吉『浦上四番崩れ』(1963年)、さらに家近良樹『浦上キリシタン流配事件』(1998年)、中村博武『宣教と受容 明治期キリスト教の基礎的研究』などをあげることができる。
- ⑮ 浦川和三郎『切支丹の復活』前篇、388頁
- ⑯ 『神の家族400年』38頁以下、高木一雄『明治カトリック教会史研究』上、289頁
- ⑰ 高木一雄『明治カトリック教会史研究』中、95頁
- ⑱ G.Ensor、英国教会伝道協会宛1869年5月12日付書簡(聖公会長崎聖三一教会所蔵)
- ⑲ 家近良樹『浦上切支丹流配事件』91頁以下
- ⑳ 註⑭記載の文献あるいは江口源一『プチジャン司教』にその経緯が詳細にのべられている。
- ㉑ 江口源一『プチジャン司教』68頁以下
- ㉒ 『パリ外国宣教会年次報告』 1、27頁、浦川和三郎『切支丹の復活』前篇、222頁
- ㉓ 江口源一『プチジャン司教』70頁
- ㉔ 『カトリック大浦教会百年のあゆみ』164頁以下
- ㉕ 前掲書、164頁
- ㉖ 海老沢有道『キリシタン南蛮文学入門』230頁以下、浦川和三郎『切支丹の復活』後篇385頁以下
- ㉗ ムニクウ編の『聖教要理問答』と『聖教初学要理』との比較をしておこう。たとえば、前者で「聖体秘跡の事△所謂聖体は如何なる事ぞや」は、後者にあつては「尊きゆかりしちやのさがらめんとこの事○ゆかりしちやのさがらめんとというハ何か」となっている。その他、天主—でうす、聖父—ばてる、聖子—ひりよ、聖神—すぴりとさんと、童身女聖瑪利亞—びりぜんさんたまりあ、耶蘇基督—ぜずきりしと、十字架—くるす、といった具合である。下川英利『教理書の変遷史』50頁以下参照のこと。また、ヨハネス・ラウレス「プチジャン司教とキリシタン伝統」(『カトリック研究』20—2、1940、『プチジャン司教書簡集』の225頁以下に再録)を参照のこと。
- ㉘ 『カトリック大浦教会100年のあゆみ』を主に参照。
- ㉙ 『パリ外国宣教会年次報告』 1、39頁、51頁

- ③⑩ 『パリ外国宣教会年次報告』 2、62頁
- ③⑪ 『パリ外国宣教会年次報告』 1、278頁、2、258頁
- ③⑫ 『パリ外国宣教会年次報告』 1、208頁
- ③⑬ 『パリ外国宣教会年次報告』 2、62頁
- ③⑭ 『パリ外国宣教会年次報告』 1、208頁—209頁
- ③⑮ 『神の家族400年浦上小教区沿革史』を主に参照。
- ③⑯ 『パリ外国宣教会年次報告』 1、63頁
- ③⑰ 『パリ外国宣教会年次報告』 2、18頁—19頁
- ③⑱ 『パリ外国宣教会年次報告』 2、63頁—64頁
- ③⑲ 浦川和二郎『五島キリシタン史』98頁
- ④⑰ 浦川和二郎『切支丹の復活』前篇396頁、海老沢有道「筑後国御原郡今村の復活切支丹」（『キリシタン研究』第18輯）を参照。
- ④⑱ ヨハネス・ラウレス「筑前・筑後のキリシタン」（『キリシタン研究』第6輯）、カトリック今村教会に関しては、『信仰の道程—今村信徒発見125周年記念誌』を参照のこと。
- ④⑳ 高木一雄『明治カトリック教会研究史』中、59頁以下
- ④㉑ 『西日本新聞』2002年（平成14年）12月25日
- ④㉒ 『中町小教区90周年記念誌』を主に参照。
- ④㉓ 『パリ外国宣教会年次報告』 1、278頁
- ④㉔ 『パリ外国宣教会年次報告』 2、18頁
- ④㉕ 江口源一『プチジャン司教』67頁
- ④㉖ ペリエ夫人については『中町小教区90周年記念誌』51頁参照のこと。
- ④㉗ 『パリ外国宣教会年次報告』 2、138頁—139頁
- ④㉘ 高木一雄『明治カトリック教会史研究』下、189頁以下
- ④㉙ 前掲書、231頁
- ④㉚ 前掲書、233頁以下および『長崎の教会』を参照して作成。
- ④㉛ 中島政利『福音伝道者の苗床 長崎公教神学校校史』および『長崎公教神学校沿革史』（『旅する教会』）を主に参照。
- ④㉜ 『パリ外国宣教会年次報告』 1、161頁
- ④㉝ 『礎—お告げのマリア修道会史』を主に参照。
- ④㉞ 高木仙石衛門については、高木慶子『高木仙石衛門覚書の研究』を参照のこと。
- ④㉟ 久志ハル子「お告げのマリア修道会の霊性」（『礎』）198頁
- ⑤⑰ 小坂井澄『お告げのマリア—長崎・女部屋の修道女たち』9頁以下
- ⑤⑱ 『旅する教会』52頁
- ⑤⑲ 『途杖 100年』を主に参照。
- ⑤⑳ 『長崎県史』（近代編）、796頁
- ⑤㉑ 前掲書、796頁
- ⑤㉒ 『パリ外国宣教会年次報告』 2、71頁
- ⑤㉓ 『海星百年史』を主に参照。

- ⑥⑤ 『カトリック大辞典』Ⅳ、43頁
- ⑥⑥ 『海星百年史』10頁
- ⑥⑦ 『パリ外国宣教会年次報告』1、287頁
- ⑥⑧ 『長崎県史』(近代編)、795頁
- ⑥⑨ 『パリ外国宣教会年次報告』3、130頁

参 考 文 献

1. 教会史・教派史関係

- 比屋根安定『日本基督教史』教文館 1949
- 海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局 1970
- ヨハネス・ラウレス『日本カトリック教会史』中央出版社 1956
- 高木一雄『明治カトリック教会史研究』3巻 キリシタン研究会 1978—80
- 下川英利『教理書の変遷史』下川英利 1996
- 中村博武『宣教と受容—明治期キリスト教の基礎的研究』思文閣出版 2000

2. キリシタン史関係

- 姉崎正治『キリシタン禁制の終末』同文館 1926
- 浦川和三郎『切支丹の復活』2巻 国書刊行会 1928、1979
- 『浦上切支丹史』全国書房 1945
- 『五島キリシタン史』国書刊行会 1951、1973
- ヨハネス・ラウレス「筑前筑後のキリシタン」(『キリシタン研究』第6輯)1961
- 片岡弥吉『浦上四番崩れ』筑摩書房 1963
- 海老沢有道「筑後国御原郡今村の復活切支丹」(『キリシタン研究』第18輯)1978
- 『キリシタン南蛮文学入門』教文館 1991
- 家近良樹『浦上キリシタン流配事件』吉川弘文館 1998

3. 教区史・各個教会史関係

- 『百年のあゆみ 1865—1965』カトリック長崎大司教区 1965
- 『旅する教会 長崎邦人司教区創設50年史』カトリック長崎大司教区 1977
- 『長崎の教会』カトリック長崎大司教区司牧企画室 1989
- 『カトリック大浦教会百年のあゆみ』カトリック大浦教会 1965
- 『神の家族400年 浦上小教区沿革史』カトリック浦上教会 1983
- 『中町小教区90周年記念誌』カトリック中町教会 1986
- 『信仰の道程 今村信徒発見125周年記念誌』カトリック今村教会 1992

4. 修道会・学校史関係

- 松村菅和他訳『パリ外国宣教会年次報告』5巻 聖母の騎士社 1996
- 『途上100年』幼きイエズス修道会日本管区 1977
- 『礎 お告げのマリア修道会史』お告げのマリア修道会 1997
- 小坂井澄『お告げのマリア 長崎・女部屋の修道女たち』集英社 1985
- 中島政利『福音伝道者の苗床 長崎公教神学校史』聖母の騎士社 1977

『海星百年史』海星学園 1993

5. 個人関係

江口源一『キリシタン復活の父 プチジャン司教』カトリック大明寺教会 1970

『プチジャン司教書簡集』純心女子短期大学長崎地方文化研究所 1986

ヨハネス・ラウレス「プチジャン司教とキリシタン伝統」(『カトリック研究』20—2、1940)『プチジャン司教書簡集』(1986)再録。

高木慶子『高木仙右衛門覚書の研究』中央出版社 1993

6. 辞・事典その他

上智大学他編『カトリック大辞典』5巻 富山房 1966—1968

『新カトリック大事典』4巻(第4巻は未刊) 研究社 1996—

『日本キリスト教歴史大事典』教文館 1988

『長崎県史』(近代編)長崎県 1976

『長崎市史』(地誌編神社教会部)下 長崎市 1929、1981

『市政百年長崎年表』長崎市 1989

(2003年1月31日受理)